

クラス会の幹事を任された佐藤は、久しぶりに中学校時代の友人に電話を入れた。

「はい、原田です」

「夜分遅くすみません。佐藤と申しますが聡史さんをお願いします」

「聡史は先週から部活の合宿に行つてまして、今日は帰つて来ないんです。帰つて来るのは水曜日の夜になるんですけど、何か急用ですか？」

「実は僕、聡史さんの中学校時代のクラスメイトなんですけど、来月クラス会をやることになったので、その連絡なんです」

「そうですか。では水曜日、聡史が戻りましたらすぐ連絡させるようにしますね。すみませんが、お名前をもう一度お願いします」

「佐藤弘と申します」

「佐藤弘さんですね。お家の方へお電話させればいいですか？」

「はい、お願いします。もし家にいない場合は、携帯電話の方にかけてもらえるように言ってもらえますか？ 一応番号を言っておきます。〇九〇―三八一八―八一三〇です」

「〇九〇―三八一八―八一三〇ですね。わかりました」

「よろしくお願いします。失礼します」

数日後、佐藤の家に原田から連絡が入った。

「はい、佐藤です」

「夜分遅くすみません。原田と申しますが、弘さんいらっしゃいますか？」

「もしもし原田か、久しぶり」

「本当、久しぶりだな。この間、連絡くれたそうだけどクラス会やるんだって？」

「そうなんだ。来月十三日の水曜日に渋谷でやることになったんだけど、原田は出席できるかな？」

「時間は何時から？」

「七時からなんだけど」

「七時から渋谷か・・・あいにくその日は部活の試合があるんだ。夕方には終わる予定なんだけど、それから渋谷まで行つても、ちよつと七時には間に合いそうにないな」

「鈴木や藤井も三十分遅れて来るって言ってるし、途中からでも出席できないか？ 本田先生もその日来ることになってるし、結構人数も集まりそうなんだ」

「そうだなあ、それじゃ早く終わつたら顔を出すようにしようかな。一応、店の名前と場所を教えてよ」

「住所は東京都渋谷区広尾三―七―一、シャトウ・ベールっていうレストランなんだ。電話番号は〇三―三六五一―一三四一、大通り沿いにあるから場所はすぐわかると思うよ」

「わかった。ありがとう」

「それじゃ、当日楽しみにしてるよ」

佐藤はそう言つて電話を切り、まだ出欠のはっきりしない何人かに再度、確認の電話を入れた。